S. SAKUMA.

27　和気清麿奏神教図

佐久間文吾

一面

明治二十三年（一八九〇）
カンバス、油彩
一三五・八×一〇四・八

描かれている和気清麿（七三三～九九）とは奈良時代に朝廷に仕えていた官人である。孝謙天皇の寵愛を受けていた法師弓削道鏡（ゆげのどうきょう）が、皇位を継ごうと目論み、宇佐八幡神の託宣があったと天皇に告げる出来事があった。孝謙天皇から事の真偽を確かめるよう命じられた和気清麿は、宇佐神宮に詣でて八幡神より真の託宣を受けることになる。

本作で描かれているのは、宇佐神宮より戻った清麿が天皇に対し、道鏡の言葉が偽りであることを奏上する場面である。しかし、天皇の道鏡への信頼はなお厚く、清麿は逆に左遷され配流の身となる。さらに道鏡からも命を狙われることになる。こうした苦難に遭うことを覚悟の上で真実を告げた和気清麿は、明治二十年代から国定教科書にその献身的な逸話が掲載されるなど、勤王の偉人として広く知られていた。

その図像としては、日本画家の菊池容斎が上古から南北朝にいたるまでの忠臣などを図像と略伝でまとめた『前賢故実』（明治元年刊）の中に清麿像があったが、本作のように迫真的で、なおかつ清麿を一人の生身の人間として描いた絵はそれまでになかった。明部と暗部のコントラストが際だった陰影表現が、命を賭して奏上する清麿の悲壮さを強調し、ほぼ影に隠れた顔の中で一点鋭く光る眼光にはこの絵を見る者をたじろがせる凄味すらも感じられる。現存する佐久間文吾（一八六八～一九四〇）の作品は限られているが、本作はその中でも明治に洋画の流入とともに確立した歴史画というジャンルにおける最高傑作と言える出来である。明治二十三年（一八九〇）に行われた第三回内国勧業博覧会で三等妙技賞を受賞し、宮内省の買い上げとなった作品。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治美術の一断面――研ぎ澄まされた技と美
三の丸尚蔵館展覧会図録No.82

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan